

<序論>

研究動機・研究目的・研究方法

筆者はハンドボールを高校・大学通じて7年間行って来た。その間、試合ではフローターとして出る機会がしばしばあったのだが、このポジションはとくにゲームを組み立てるにあたって大変重要なポジションであると感じた。特にセンターはゲームメイクするのが役割である。どうすればチームとして機能しつつ点が取れるのか、どうやってほかの人の動きを生かそうかなど、常々考えさせられた。そのなかでハンドボール界でも常に世界の上位につらなるスウェーデンのセンタープレイヤー、アンデルソンという選手のプレーに関心をもった。本研究では例証分析の対象としてアンデルソン選手に注目して、そのプレー（アシスト・突破）を分析していきたい。彼の巧みにゲームをコントロールするプレーはゲームメーカーとして理想的ともいえる。彼は比較的日本人に近い体格にもかかわらず世界の大型選手を相手に、対等以上に戦っていることから、きわだった技術・戦術を読み取れると考えたからである。アンデルソン選手はどのような運動感覚で、どのような技術・戦術を駆使して得点をあげているのか、その運動経過をモルフォロギ的研究法に基づいて、印象分析により明らかにし、今後のプレーの糧にしたい。

研究方法として、IHF(国際ハンドボール連盟)から入手した1997年男子世界選手権大会(熊本5月11日～6月1日)における予選リーグから決勝トーナメントまでの全試合の国際映像からスウェーデンのアンデルソン(Sweden・Andersson Magnus・#14・身長/体重 180cm/76kg)が起点となっている攻撃成功の典型的事例を抽出、分類し、各事例の運動経過をモルフォロギ的研究法に基づいて、印象分析していく。

<本論>

1章 ハンドボール競技の構造的特性

ハンドボールの個人戦術をみるには、ハンドボールの構造的特性を理解した上でモルフォロギ的研究法に基づいて運動観察することが大事である。そこでゲーム特性にふれ、ゲームに用いられる技術・戦術特性についてまとめた。さらに個人戦術の位置づけを明確にするためチーム戦術・グループ戦術及び個人戦術の規定概念を整理し、個人戦術の重要性を明らかにした。個人戦術はチームとして機能するための前提で、効果的に集団プレーを展開するための重要な戦術と位置づけて考える。スタンドプレーという言葉があるが、それは集団プレーと一切の関連を断った横暴なプレーで、チームとして機能していない。あくまでも個々の技術をゲームの状況に応じて適確に複合的に選択し、行う個人戦術が大事であると考えた。

2章 ゲームの運動観察方法

次に運動を観察する視点について、モルフォロギ的研究法(印象分析、自己観察・他者観察)の重要性を明らかにした。そこで運動経過の特徴を運動記述を用いて浮き彫りにし、さらにマイネルの諸カテゴリーを用いて本質的にとらえようと試みた。諸カテゴリーとは①運動の局面構造、②運動のリズム、③運動の伝導、④運動の流動、⑤運動の弾性、⑥運動の先取り、⑦運動の正確さ、⑧運動の調和の8つである。個人戦術をみるにあたって、運動の局面構造、運動のリ

ズム、運動の先取り、運動の組み合わせが強く関連していると考え、モルフォロギ的研究法、マイネルのカテゴリーを用いて実際に例証分析を行った。

3章 ゲームの運動観察の実際：例証分析

アンデルソンの攻撃成功の起点となった典型事例から特徴的な動きは7種類あった。そのなかから突破を3つ、アシストを4つに分けることができた。

突破はステップシュート(ショルダーシュート)を得意とし、つめてくるディフェンスの頭の上や横からうっている。さらにサイドハンドに変化して腰脇からもある。カットインは3対3、3対2の味方とディフェンスの状況をみながら行い、位置取りで間・リズム・歩幅を変化させることによって相手を「引きこんだり」、「はずしている」と考えている。そして突破の抜いてから打つまでを力強く、すばやく行っている。(写真1参照)

アシストは突破を図りながら味方に優位に突破しやすい位置に出すことを前提に、タイミングを間・リズム・歩幅のためにはずすもの、相手に誤って先取りさせ虚をつくもの、相手に対応する難しい場所(股下、足元、腰脇)にだすものを状況に応じて複合的に組み合わせている。(写真2参照)

得意とする突破Ⅲ(かわしてのショルダーシュート)を基として突破を図りつつ、状況に応じて多様なアシストへ変化していくプレーは、グループ戦術のなかで効果的に生きている個人戦術といえよう。シュートかもしれないし、パスかもしれないと考えさせる「位置取り」、「走りこみの入り」「間」で相手を感かせ引きこませる動きとリズムをもって、効果的に実行している。

自分の基盤となる技術・動きをもとに状況によって選択し、実行する。そのさいに相手・味方の運動投企をしたうえで、絶えず変化している状況のなかで応じ、突破・アシストまでもちこんでいると考えられる。多様な選択肢のなかから実行するプレーを状況に応じて効果的なものを選択し、さらに選択したことによって変わる状況に、応じて対応動作として変化させている。つまり二重に状況変化に応じているといえる。

<結論>

個人戦術について、まずプレイヤーがしっかりとゲームの構造的特性を理解すること、共通のチーム基盤を確認し、チーム、グループ戦術の前提のもとで発揮するものと考えたい。そこで個人戦術での課題に対して技術的訓練をしていく必要がある。

典型事例から「位置取り」、「走りこみの入り」、「間」、「応じること」が非常に大事であることがわかった。位置取りで優位なポジションに走りこみ、その走りこみはいわゆる状況にすぐ応じられるようなニュートラルな状態に入り、ディフェンスに考えさせる間をとり、さらに状況をみて二重に反応している。

一流のプレイヤーの本質的な運動感覚に共感し実践するには、まずは多様な運動を経験し、運動感覚を増やすこと、運動の質を見抜こうとする継続的意識づけが必要である。それとともに実際に動こうとしてみることでプレイヤーはもちろん指導者にとって大事である。

我々が実践したり、指導または一般化したいのは、技術はもちろんののだが、あくまでもゲームでの動きや戦術である。それを科学的に解明するのはなかなか難しい。「そんな感じ」という感覚を共有できる方法を確立すること、さらに「間」や「応じること」、どのような運動経験をしてきたかを明らかにしていけばより深い分析が行えるのではないかと感じた。

(引用・参考文献省略)